

吉原好人

第一章 ホメロスより觀たるペラスゴイ

第二章 ヘロドトスより觀たるペラスゴイ

第一項 ペラスゴイとヘレネス

第二項 ペラスゴイとペラルギコン

第三項 ペラスゴイとエトルスキ

第三章 ペラスギコンとペラスゴス (以下次號)

第一項 アルカディアのペラスゴイ

第二項 アルゴスのペラスゴイ

第三項 テッサリアのペラスゴイ

第四章 ペラスゴイ論史

一般古代史に於て特に研究の困難を感ずるのは或る民族の起源發生、或はその歴史上の價値を論ずる場合であつて、概ね諸説紛糾して、吾々後學の徒は何れに従ふべきかに迷ふのである。古代希臘民族研究に際しても、やはりその感を深くするのであつて、希臘の先住民と稱せられるペラスゴイ

(Pelasgion)などは、實に二千年來種々に議論せられて居る有様である。今ペラスゴイに關する古代人の諸説を紹介して、幾分なりともこの問題を明らかにしたいと思ふ。

第一章 ホメロスより見たるペラスゴイ

イリアス(II 840-843)にペラスゴイは、トロイの同盟軍として描かれヒッポトウス(Hippothous)及びピレウス(Pyraeus)が鎗を以て有名なペラスゴイを率ひて、「豊沃なラリサ」(Larissa)からトロイ役に參加して居る。かくホメロスは、ペラスゴイを一民族として、ブリアムの味方として歌つて居る。同書X. 428-429には彼等がトロイと海岸との間に、居を占むることが述べられて居るが、勿

論これは彼等の平和の時の住地でないことは明らかである。故にペラスゴイの住地を決定するには彼等がやつて来た「豊沃なラリサ」が何處にあるか、議論の中心になる。先づ第一、歐羅巴にあるか、小亞細亞にあるか、問題である。(1) ブゾルト (Buzolt) はペラスゴイが Carians, Paeonians, Teleges, Caneones 等と一緒に現はれて居るが故に、(2) ペラスゴイを "Asiatic" とする(3) ところで、ストラボ (Strabo) によつてみると、ラリサは小亞細亞に三つある。トロイの西岸と、キイメ (Kyme) 及びエフェソス (Ephesos) 近くの村落とである。(4) 故に人々はペラスゴイの住地をトロイの西岸とし、或はキイメ、或はエフェソスとする。然し「豊沃な」 eribolax に價するのは、トロイ西岸の丘地でもなく、又エフェソスの高地でもない。寧ろヘルメス河口北縁のキイメ附近であらう(5)。尙ストラボは有力な證言を提供する。アエオリア人は、ロクリ

ス (Locris) からキイメに上陸して、トロイ戦後疲弊したペラスゴイを見出した。しかも猶、ラリサを占有し、其地から三十スタディオン距つたネオン・テイコス (Neon Teichos) に定住してゐた(6)。故に若しペラスギコンの住地を小亞に求めるとすれば、キイメあたりであらうか。

然しイリアス II. 681-685 には、希臘方の將アケレウスがペラスギコン・アルゴス (Pelagikon Argos) やピタイア (Phthia) ヘルラス (Hellas) 等に住する人人を率ひてトロイ役に参加して居る。

このペラスギコン・アルゴスといふのはテッサリアのペラスギオテイス (Pelagionis) といふ土地の古名であり、そしてラリサは其處の主邑である。この地に實際のペラスゴイが存在したことを古代史研究家マイヤーは力説する(7)。

若しマイヤーの言ふが如きであれば、ペラスゴイは希臘方とトロイ方と兩方に分れて戦ふことに

なる。そこでマイヤーは小亞のペラスゴイを否定して、之をテスサリアに指定し、そしてホメロスがアキレウスと同郷に居るペラスゴイを敢てトロイ方に組せしめた理由として、ペラスゴイとその南方のピタイアやヘラス居住の希臘人<sup>ヘレネ</sup>との多年の反目抗争にあると論ずる。<sup>98</sup>

然しペルシャ戦争の時、アエオリア人・イオニア人其他の希臘人が波斯方であつた如く、古代民族の移住と長い時の経過とを考ふれば、ペラスゴイが小亞に居てトロイ方として戦つたとしても差支ないわけである。これ小亞説に賛成する所以である。

次に如何なる材料によつてかく断定するか不明であるが、彼等の住地はヘレスポントとトラキヤ東南部との間に在つて、此地から彼等は各方面に移住したとする説がある。<sup>99</sup> 然しこの説のよつて來る根據を明らかにしない爲、なんともいはれな

い。

オデイスセシア (XIX.173-177) による<sup>100</sup>、ペラスゴイはクレテ島にアカイア人・ドーリア人及び土着民と對立居住して居る。ディオドール (Diodor) はクレテの住居を述べて、最も古くから居住するのをエテオクレテス (Teokrates) とし次にペラスゴイ來住し、ついでドーリア人・アカイア人等が南下したと。<sup>101</sup> 又神話研究家アンドロン (Andron) は、ドーロス (Doros) の子テクタフォス (Tektafos) はドーリア人・アカイア人とヘレネス侵入により、ヘステイアエオテイス (Hesteaiois) からエトルリヤの方へ移住しなかつた殘部のペラスゴイと共にクレテに來たと述ぶ。<sup>102</sup> かくペラスゴイがクレテにも居たことが想像される。

以上ホメロスに現はれたペラスゴイの住地を探究し、彼等がよしキイメと断定出來なくとも、兎も角小亞の或る地方と、多島海最大の島クレテと

に居住したことを認めたのである。

註(1) ラリサ及びヘラスゴイの地に關して手がかりとなるべき記事はホメロスには殆どない。

- (2) II. X. 428-429
- (3) How & Wells: A Commentary on Herodotus, Book I-IV. 442 P.
- (4) Strabo: XIV. I. 42.
- (5) Bury は彼の著書 History of Greece. 1924. 48P に於てラリサをトロイの南方イタ山の南とする。
- (6) Strabo: XIII. I. 3
- (7) Ed. Meyer: Forschungen zur Alten Geschichte. S. 36.
- (8) Ibid. S. III.
- (9) How & wells. 442 P. Encyclopaedia Britannica. 11th. Diodor. V. 80.
- (10) Strabo. X. 4. 6.
- (11)

## 第二章 ヘロドトスより觀たるヘラスゴイ

### 第一項 ヘラスゴイとヘレネス

ヘロドトスによれば、ヘレネス (Hellenes) の中最も著名なのはラケダイモニア人とアテナイ人である。後者はイオネスであり、ヘラスゴイであ

る。前者はドウリスであり、純ヘレネスである。(1) 即ちアテナイ人はヘレネスであり、イオネスであり、ヘラスゴイであると言ふ。又今ヘラスと言はれてゐる地が、ヘラスゴイによつて占められてゐた時代、アテナイ人はヘラスゴイでありクラナオイ (Kranaiō) の名を得、ケクロボス (Kekropos) 王の下ではケクロピダイ (Kekropidai) と呼ばれ、エレクトオス (Erechtheos) がアクロポリスを占領するに及び、彼及び彼の一黨の信仰する女神アテナからして、アテナイオイと變名し、更にクストス (Kysthos) の子イオノス (Ionos) 主權を握るに及び、彼等はイオネスと稱せられた。(2) アテナイオイが時代によつて、ヘラスゴイであり、或はケクロピダイであり、或はイオネスであると言ふのである。

アテナイ人の成立について VII. 44 によつて想像すれば、アテナイにかつてヘラスゴイが生存する。其後ケクロボス・エレクトオス・イオノス等――

彼等は傳説上の王名としても一兎に角支配者が相次いで侵入し、従つて住民の名もそれに伴つて變化する。かく支配者と共に、其地の住民の名稱が變更するといふことは、次に異なるた人種の要素が加はつていつたことを意味する。これについてツキデデスも、希臘の有力者が戦争や革命の爲、彼等の國を追はれると避難をアテナイに求めて市民となり、アテナイの増大を來たしたことを述ぶ。<sup>53</sup> 即ちペラスゴイを基調としたアテナイの住民に、多數の異分子が混入して所謂「ヘレネス中最も著名な」アテナイオンが成立したものと推定する。故にペラスゴイ時代からアテナイ人が成立する迄には長年月が経過してゐる。この長年月の間にペラスゴイの言語も多數の異種族の影響をうけて變化する。次第に融合された希臘語になつて行く。そこで確かにペラスゴイであつたアテナイ人は、ヘレネスとなるに及び彼等の言語を變化

したにちがいない。<sup>54</sup> といふのは此間の消息を談るものか。

そしてヘレネスは、彼等が民族として成立してからは、同じ言語を用ひた。ペラスゴイから分離した當初彼等は數に於て、力に於て微弱であつたが、他の多くのバルバロイを結合して大國民となつた。然るにペラスゴイはバルバロイであつて増大することはなかつた。<sup>55</sup> これはヘレネスが民族として獨立してからは大いに自覺發展して行つた。之に反してペラスゴイは取り殘され、人口も増殖することなく彼等自らの中に消滅しつゝあつたことを意味する。

もと／＼ペラスゴイが如何なる言葉を話したかといへば、現存するヘレスボンと南岸のペラスゴイから推測するとバルバロスである。<sup>56</sup> 即ち彼等をヘレネスであるといひながら、彼等は希臘語を談らないといふので、ヘロドトスの記事の不正確

について議論が生ずる。

然しこの矛盾は、ペラスゴイの或る一部が、或る時代にアテナイに居を定めて、ヘレネスになつたことを考ふれば容易に氷釋する。アイヌ人が日本語を話さなくとも、日本人たるに差支へない様に、元來希臘人でないペラスゴイが希臘語を話さなくとも、アテナイに住んでから後に希臘人と呼ばれて少しも差支へない。

ペラスゴイが希臘人であるか、或は非希臘人であるかについての多くの議論も、要するに「或る時代」を考へないが爲に惹起されるのでこの或る時代を限度として、ペラスゴイは非希臘人であり、又希臘人でもあり得るのである。然らばこの時代とはいつ頃かといへば、正確に答へ得られない。然し少くとも紀元前一千年以上遡らなければならぬことは確かであらう。<sup>(7)</sup>

ヘロドトスは尙ペラスゴイがヘレネスに及ぼせ

る影響について次の様なことを述ぶ。

希臘人がヘルメスの像をたてるのは、ペラスゴイから學んだのであるとし、<sup>(8)</sup> 又ペラスゴイは神に犠牲祈禱を捧げたが、神に名や姿を與へることはなかつた。たゞ萬物を秩序正しく整備し給ふが故に、神(Theos)「整頓者」と稱した。然し後、埃及から神々の名稱を入れこれを希臘人に傳へた。<sup>(9)</sup> ペラスゴイが後世に及ぼした影響として、僅かに此位の記事しかない。しかも全然信用してしまふわけにもいかぬ程度のもので、従つて歴史上の價値の上からいへば、ペラスゴイはとるに足らぬものである。

(1) I. 56.

(2) VIII. 44. Bury: 164 P.

(3) Theopides I. 2.

(4) I. 57.

(5) I. 58.

(6) I. 57.

- (7) Buryはケクロポスの侵入をB.C. 1500とする後エレンケテ  
 オス來住してアテナイ成立この時代を指すわけである。  
 (8) H. St.  
 (9) H. St.

## 第二項 ペラスゴイとペラルギコン

アテナイ、アクロポリスの西から北にかけて、懸崖の中腹から頂上平地の下部に至る段丘に、古い切らない灰青色の岩塊によつて、環狀の壘壁が繞らされてゐる。<sup>(1)</sup> これ確かに古代アクロポリス城壁の遺跡である。これはピシストラツス時代にもなほ、稜堡として役立つたが、波斯人に略取され、其後キモン・ペリクレスによるアクロポリスの徹底的修理の際殘餘僅少になるまで消失してしまつた。<sup>(2)</sup> この遺跡をアテナイ人はペラルギコン(Palargikon)と稱した。どうしてアテナイ人が、この石壘をペラルギコンと稱したか、何か表面的の理由があるかもしれないが、明らかでない。

1880 エレンツシス(Helensia)發見の碑彫に、ペラル

ギコンの綴があり、ツキヂデスΠΙΤにもみうる。<sup>(3)</sup> 然しツキヂデスの譯本には、ペラルギコンがペラスギコンになつてゐる。<sup>(4)</sup> 即ちペラルギコンが何時の間にか、ペラスギコンに轉稱されてゐる。

元來ペラスゴイがアツチカに存在したとする記事をものした最初の人、ヘロドトスによれば、ミレトスの人ヘカタイオスである。<sup>(5)</sup> 彼は所謂ロゴイオイで知識慾旺盛にして、學術的研究を求めだした時代の先驅者では、ヘロドトスと同時代の人である。彼はこの名前を歴史的に研究説明することを求めた。その結果先住民ペラスゴイの築造によると確認し、彼はペラスギコンと變化さした。<sup>(6)</sup> これが轉稱の始めであらう。

かくてアテナイ人はペラスゴイがアツチカに居住し、アクロポリスの城壁を築いたといふことに關しては、ヘカタイオスを信じた。自信強き、ヘロドトスさへ、これに賛成した。然しペラスギコ

ンの名稱の起原については、アテナイ人はヘカタイオスの説を逆に、ペラルギコンによつて、ペラスゴイを説明せんとする。即ちペラスゴイは度々の移動の故に鶴 (Pelargoi) と渾名され、これからペラスゴイの名が生じたと言ふ。<sup>(7)</sup> 何れにしてもペラスゴイとペラルギコンとの間に關係の存することは明らかである。

- (1) Ed. Meyer: S. 9. Bury. 164 P.
- (2) Ibid. S. 9.
- (3) " "
- (4) Reclams 註 Die sogenannte Pelagische Mauer. Jowett 譯 The Pelasgian ground.
- (5) Herodotus, VI. 137.
- (6) Meyer: S. II.
- (7) Ibid: S. 12.

### 第三項 ペラスゴイとエトルスキ

VI. 137 によれば、ペラスゴイがヒメツス山麓に於て、アテナイ人により與へられた土地を耕作してゐたことが述べられてゐる。<sup>(1)</sup> そしてかつて

不毛であつた土地が、良耕地となつたのをみて、アテナイ人は彼等を追放した。然しアテナイ人自身の言ふところによれば、正當に行爲したのである。即ちエンネアクルウノス (Enneakrounos) に水汲みに出かけるアテナイの男女の子供に對して、屢々暴行を加へた。のみならず遂にアテナイを篡奪せんとする計畫が暴露するゝに及び、此地の退去を求めた。そこで彼等はレムノス島に新住地を求め、同島の先住民アルゴナウツ (Argonauts) の子孫ミニアイ (Minyai) をスバルタの方へ追ふた。<sup>(2)</sup> そしてアテナイ人に復讐する爲、ブラウロン (Brauron) に於けるデアアナ祭典に待伏せ、アテナイの女達をレムノスに連れ歸つた。<sup>(3)</sup> 其後如何にして、アテナイの勇將ミルチアデスに再びレムノスを追はれたかは VI. 138-140 に述べてあるが、あまりに物語的傳說的で、歴史内容の乏しきものと思へる。それは宛に角レムノスの住民につ



いて他の文献を求めれば、エホオロス (Ephoros) はレムノスの住民をテイルセノイ (Tyrsenoi) としよ。

プルタークは、ミニアイと混合したテイルセノイとし、アポロニウス・ロードス (Apollonius Rhodos) は、ミニアイがテイルセノイに追はれて、スバルタに赴き、テラ (Thera) をたてたとする。<sup>4</sup> ホメロスには、シンタイエス (Sinties) が居る。<sup>5</sup> フィロコロス (Philochoros) はシンタイエスをペラスゴイ及びテイルセノイと同一視して、ブラウロン掠奪の故に興へられた渾名 *sincothai* から来たと言明する。ツキヂデスも亦、トラキヤの或る地方に居るペラスゴイは、アテナイ、レムノスに居たテイルセノイから出たといふ。<sup>6</sup>

以上により大體想像出来る如く、ペラスゴイとテイルセノイとは、一般に混用され、この二つの民族は同一のものか、それに近いものどみなされ

ペラスゴイ (吉原)

てゐる。そうするとこゝに問題が生ずる。

古代イタリアの住民エトルスキ (Etrusci) は希臘人には、テイルセノイと呼ばれてゐる。故にペラスゴイとエトルスキが同一民族かそれに近いものになつて来るといふことである。この意見を代表するものはヘラニコス (Hellantikos) である。彼は希臘人によつて、追放されたペラスゴイが、イタリアに到つて、名をテイルセノイと變へ、エトルリアを見出したとする。<sup>7</sup> 彼によればペラスゴイとテイルセノイとエトルスキとは同一民族のたゞ名を變更したものにすぎない。

又アンタイクレイデス (Antikleides) はペラスゴイをレムノス・インブロス等に植民させ、それから彼等の一部アテイス (Atys) の子テイルヘノス (Tyrihenos) を一氣にイタリアと聯合させる。<sup>8</sup>

然るに、ヘロドトスはこの問題を如何に考へたかといふに、テイルセノイとはリディア人 (Lydia)

が多年の飢饉に苦しみ、その一部が王アテイスの子テイルセノスの下に、ウムブリア地方に移住して、テイルセノイと稱したといふ。即ち彼によれば一見、ペラスゴイとテイルセノイ即エトルスキとは關聯がない様である。然しリディア方面はペラスゴイと全然關係ないとは言はれない。第一章に於て、ホメロスに現はれたペラスゴイをキイメ附近に結びつけた。即リディア地方にペラスゴイをみたのである。故にエトルスキがペラスゴイと同一民族とは言へないが、多少の關係あることはいへる。

尙これについてレプシウス (Lepsius) はエトルスキの文明は、テイルセノイ・ペラスゴイに歸すべきものとし、アドリアテイツ頸部からイタリアに入り、ポー河口方面に植民し、アペニン山脈を越え、エトルリアを占領し、ウムブリアを征服した。そしてこのウムブリア人とペラスゴイとの融合

によりエトルスキを形成すると。

又セルギ (Sergii) はエトルスキを以て、後のペラスゴイとし、希臘に來れる史前のペラスゴイより時代の遅れたものとし、大體ヘロドトスの説に賛成して小亞起原説を探りペラスゴイがウムブリア人と混和したものとす。蓋し最も穩當な説であらう。

- (1) Bury は今迄アクロポリスをペラスゴイは占領してゐたが、ケクロボスの侵入によりこの方面にしりぞいたとみる。164.
- (2) VI. 137. IV. 145.
- (3) VI. 138.
- (4) Ed. Meyer: 19 S.
- (5) II. I. 594. Od. VIII. 294.
- (6) Thuc. IV. 109.
- (7) fr. I. Fragmenta Historicorum Graecorum, : 45.
- (8) Strabo, V. 2. 4.
- (9) I. 94.